ペルシア神秘主義説話文学の女性像〜アッタールの『神の書』より〜

佐々木あや乃

はじめに

ペルシア神秘主義詩人アッタール（ʿAṭṭār-i Nīshābūrī, Farīd al-Dīn Muḥammad 一二二一年没）は、そのすべての叙事詩（マスナヴィー）作品の中に数多の説話を組み込み、神秘主義思想の普及に大いなる貢献をしたとして、ペルシア文学史上高い評価を得ている。彼が最初に手がけた『神の書（*Ilāhī-nāmah*）』は、神秘主義道のごく初期段階――「シャリーア（sharīʿat）」と呼ばれる外面的な法規定（イスラーム法）に従う段階――について説いた作品である。次いで著した『神秘の書（*Asrār-nāmah*）』には「タリーカ（ṭarīqat）」と称する自己の内面探求のための修行道の初期段階が描かれ、その後アッタール自身が神秘主義道での修行に励んだ結果、傑作と評される『鳥の言葉（*Manṭiq al-Ṭayr*）』、そして『災いの書（*Muṣībat-nāmah*）』を執筆したことがこれまでの研究により明らかにされており、アッタール自身、生前に純粋な心的境地――神、真実たる「ハキーカ（ḥaqīqat）」――にまで至っていたものと考えられる。つまり、逆に言えば、『神の書』執筆段階では、まだ彼は神秘主義の道を歩み始めてまだ日が浅い初級者にすぎなかったのである。

また、アッタールはその神秘主義道を歩む中で経験した、自身の内面の葛藤や闘いを直截に自らの作品の中に描出している。それが、彼が医術を通してさまざまな階層の人々と接触し、大衆の苦悩や社会的抑圧を直接肌で感じていたことや、さらには当時の天変地異や支配王朝の推移等といった社会の不安定要素に起因しているであろうことは容易に推測できる。

神秘主義道入門者に向けた説話文学『神の書』に「狂人」を多く登場させていることには既に触れた[1]が、『神の書』を読み進めると、アッタールの描く女性主人公たちが実に生き生きと、各物語の中で非常に重要な役割を担って描かれていることに気づく。預言者ムハンマドの妻たちや娘のファーティマ、王の娘、聖女ラービアや高潔な女等、社会的に尊敬を集めるような女性や高貴な女性のみならず、『ライラーとマジュヌーン（*Laylī va Majnūn*）』や『ユースフとズライハー（*Yūsuf va Zulaykhā*）』といった古くから伝わる恋物語のヒロインもいれば、メッカに巡礼する女、身分違いの恋に苦しむ女、黒人奴隷の女、老婆（時には狂女）といった市井の女たちも主人公として登場する。全二六〇もの逸話のうち約三〇の話の中でこうした多岐にわたる女性たちが重要なキャラクターとして登場するという点で、『神の書』は一二世紀の神秘主義文学としては異彩を放った作品といえよう。

『神の書』で最も目を引く女性像は、第一章すべてを占める物語「夫が旅に出てしまった高潔な女の話」の主人公である。また、逸話ごとに異なる役割を担ってあちこちの逸話に登場する老婆も実に魅力的な存在で、王に堂々と進言したり、正気とは思えないのに放つ言葉に重みがあったり、と目が離せない。

そこで、ここでは『神の書』の数多の説話の中から第一章の物語の女主人公と、複数の逸話に登場する老婆とに的を絞り、アッタールが各々の女性に託した思いを探り、当時の女性に対するアッタールの目線を浮き彫りにすることを試みる。

一．夫が旅に出てしまった高潔な女の物語（第一章第一話）

『神の書』の冒頭では神や預言者ムハンマドへの賛辞が述べられており、その直後の第一章は、あるカリフが息子である六人の王子たちに各々の望みを尋ねるところから始まる。王子たちは各々父王に心の望むところを答えていくのだが、まず長男が口を開き、筆舌に尽くしがたい美貌をもった妖精の王の娘を手に入れたいと言う。それを聞いた父王が「お前は欲情に囚われてしまっているのだ」と嘆き、長男に対する忠告として語り始めるのがこの第一話である。十二頁以上にも及ぶ長い物語であるため、ここでは紙幅の関係上ごく簡単にあらすじを紹介することとしよう。

物語のあらすじ

あるところにたいへん美しく善良で高潔な女性がいた。突然彼女の夫がメッカ巡礼に出かけることになり、夫は弟に妻や家を託して旅に出る。しかしその弟が、ヴェールから顔が偶然見えた兄嫁の美しさに心打たれ恋に落ち、兄嫁に言い寄る。女は毅然とした態度で義弟を諭そうとするが、義弟は偽の証人を買収し、兄嫁の不貞を訴え、女は有罪とされてしまう。

無実の罪で石打ち刑にあった瀕死の女を、通りがかったアラブ人が救う。アラブ人の庇護の下で快復した女はすっかり美貌を取り戻すが、女の美貌を知ったアラブ人は自分の二番目の妻にしようとする。自分は人妻の身であるからとそれを断り、アラブ人も女の誠実さを理解し、二人は兄妹の契りを交わす。ところが、アラブ人の下で働く黒人の下僕が女に恋し、女に告白する。相手にされなかった黒人の下僕は、アラブ人の妻が産んで間もない赤ん坊を殺し、女に濡れ衣を着せる。女の無実を信じたものの、女をこのまま家に置いておくわけにはいかないと判断したアラブ人から銀貨三百枚を受け取り、女はアラブ人の許を去る。

女がしばらく歩いていくと、とある村で税を納められなかった若者の絞首刑が行われようとしているところに出くわす。若者の命は銀貨三百枚と引き換えと聞いた女は、惜しげもなく銀貨を払い、若者を救い出す。女の美貌に魅惑された若者は、女から離れずに歩き続け、二人はとうとう海岸に出る。自分の言うことを聞かない女にしびれを切らした若者は、自分の婢女であると嘘をついて船に品物を運ぼうとしていた商人に女を売り飛ばしてしまう。

女を買った商人もまた、女の美貌に欲情を抑えきれなくなり、

女に近づこうとしたため、女は乗船者全員に助けを求める。すると、今度は乗船者たち皆が女に魅惑され、女を自分のものとしようとしたため、女は神に祈りを捧げ、遂には気を失う。すると、海面が波立ち始め、海面から火柱が噴き上がり、女と船の荷物を除いてすべて焼き尽くしてしまう。

女を乗せた船は、とある町に着く。女であるがゆえにこれまでの苦労を味わったと考えた女は男装し、町の人々にその土地の王に会わせてほしいと伝える。美しい男に会い、事の顛末を聞いた王は、男の望み通りに神殿を建て、そこで男が神の崇拝に努めることを許す。

やがて王の死期が迫り来ると、王は王国をこの男に託そうとする。男は妻選びと称して百人の高貴な娘とその母親を集め、自らが女であることを告げる。女は自分の代理として王国を治める男を選び、自らは神殿での礼拝に努める。女の名声は世の中に広まり、この聖女が神に願うことは必ず叶えられるとか、手足の不自由な者も彼女の許に来れば歩いて帰るようになるといった噂が広まる。

メッカ巡礼に行っていた夫が家に戻ると、妻の姿がないうえ、弟が視力を失い、手も足も不自由になっているのを目にする。弟は自分に有利な嘘の話を兄に聞かせ、女は石打ち刑で死んだと伝える。落胆しきった夫だったが、弟が視力を失い、手足が動かないことに心を痛め、かの奇跡を起こす女の話を耳にし、弟をそこへ連れていくことにし、二人で旅に出る。道中、偶然アラブ人の家に泊まった二人は、その家の黒人の下僕も同様に視力を失い、手足が動かないのを見て、一緒に旅に出ようと誘う。連れ立った彼らが次に泊まった宿の所有者が、偶然、件の絞首刑から救われた若者であった。その若者もまた、視力を失い、手足が不自由になっていたのだった。

四人が揃って女の許にやって来ると、女はすぐに全員を見極め、苦悩するが、罪深い三人に、治療の条件は真実を話すことであると提示する。三人がようやく真実を語ったところで、女は三人をもとの身体に戻し、夫と二人きりになったところで自分が誰なのかを夫に明かす。夫との再会を喜び合った後、女は夫を王座に据え、アラブ人を大臣にし、悪党三人にも財産を与え、自分は幸せをかみしめながら神殿で神に仕え続けたのだった。

物語の分析

我々にサド侯爵の『美徳の不幸』を想起させるようなこの第一話の冒頭部分では、ペルシア古典文学の伝統ともいえる比喩表現を駆使した、主人公の美貌の形容の連続に目を奪われる。

「昼のように明るい顔と夜のような黒髪 (shab-ō rūz az rokh-ō zolf-ash mesālī)」[2]

「数多の輪を描く髪 (kham az panjah fozūn-ō shast(o) ham dāsht)」[3]

「真珠（＝価値ある美しい言葉）を撒く紅玉（ルビー）のような唇を開くと (cho bogshādī ʻaqīq-ē dor-feshān rā)」[4]

「その（＝唇の）真珠は彼女の歯でできていた (ke morvārīd-ash az dandān-e ʻū būd)」[5]

「白銀のりんごのような顎の凹み (zanakhdān-esh cho sīmīn sīb(o) būdī)」[6]

また、女の目と眉の美しさをペルシア語のアルファベットの

形に見立ててこう表現する。

「彼女の目と眉はサードとヌーンの文字（cho chashm-ō ʼabru-yē ū ṣād-o nūn būd）」[7]

ペルシア語の文字のアルファベットの形を比喩表現として用いるのも、ペルシア古典文学の伝統の一つである。アルファベットの十七番目の文字サードは ص という形で、これを目に、二十九番目のヌーン ن を眉に譬えている。

これらに加え、この女性の善良さ、深慮に長け慎み深いさま、勇敢さが語られ、この物語の主人公がほぼ非の打ち所のない完璧な女性であることが窺われる。しかし、この彼女の美貌と美徳が自身に不幸を呼び込むことになるのである。

物語は主人公自身全く予想だにしない出来事によって動き始める。その後度重なる事件は女を不幸へと導くようにしか見えず、彼女の苦難に満ちた旅には、道標もなければ神秘主義道に不可欠な導師も見当たらない。ただひたすらに、天の導くままとでも言うべきか、神が定めた運命に翻弄され、女は旅を続ける。

しかし、この物語には単に読者の興味を引く読み物であるのみならず、神秘主義修行者に対する重要な教えやメッセージがふんだんに盛り込まれていることを見逃してはなるまい。ストーリーの展開を追って、神秘主義的側面からアッタールの教えを見ていこう。

義弟の嘘を信じた裁判官によって石打ち刑に処された女は、明らかに世間の非難の的となった。この非難は、神秘主義道を歩むうえで不可欠と考えられる「マラーマティー」が体現されていると見做すことができる。マラーマティーとは、表面上の敬虔さや見せかけの善行は本来意味を持たないため、人間は神からの褒美や他人からの賛辞を求めるべきではなく、自らを進んで非難の対象とすべきである、という考え方である。これがアッタールのこの物語から抽出できる第一の教えである。

また、物語の前半部分で、女はさまざまな男たちの情欲と正面から向き合わざるをえない状況にまま陥る。人間の欲とりわけ情欲は最も卑しく、神秘主義道を歩む際に真っ先にかなぐり捨てるべきものと見做される。神秘主義では、人間が自らの欲や現世への執着を取り除いて初めて、神と自身とを隔てる帳を取り払うことができると考えるからである。しかし、人間も動物である以上、情欲を捨て去ることはそう簡単ではない。そこで、義弟に始まりその後何人もの男たち（最後には乗船していた男たち全員！）の申し出を雄弁さで説得しようと試み、頑なに断り続ける女を描くことによって、この深く大きな情欲という帳を取り払うことの難しさをアッタールは示そうとしたと考えられる。これが第二の教えである。

アラブ人から三百枚の銀貨を受け取って旅に出た女は、見ず知らずの若者の命を救うため、気前よく路銀すべてを使ってしまう。神秘主義道では、すべての財産から心を切り離すことも重要な要件である。女は銀貨に対してなんらの執着心も見せず、すべてを若者の命のために使ってしまう。その後その若者にどれほどひどい目に遭わされ、結果的には商人に婢女として売り飛ばされてしまおうとも、あっさりと金を手放したことを微塵も後悔していないという点では、女は実に信じがたいほどの模範的な振舞いをみせている。第三の教えは、この物欲（とりわけお金に対する執着心）を断ち切ることである。

第四の教えは、神に真摯に向き合うことの重みである。女は商人に売られてしまい、船は海へと漕ぎ出る。海は、イラン人にとっては昔も今も、危険に満ちた、何が起こるかわからない未知の世界であり、漕ぎ出てしまえばほかへと逃げる手段も見当たらない[8]。女は男らの情欲を避けるため、最後の手段として神に自らの死を求めんとひたすらに祈る。神は女の願いを聞き届け、突然海から火柱が上がる。イランの神話や伝説では無実を証明するために度々火が登場する。火は罪を犯したものを焼き、無実のものには一切害を及ぼさない。この物語でも、女と積荷を除いたすべて、つまり情欲に燃えさかっていた男たち全員を、火がきれいさっぱり燃やし尽くしてしまうのである。

海岸に辿り着いた女は男装する。これまでの経験から、「自分が女であること」がすべての不幸の原点であることをいやというほど思い知らされたからである。アッタールは自身の散文作品『イスラーム神秘主義聖者列伝(*Tazkirat al-Awliyā*)』の中で、女性神秘主義者ラービアについて「女が至高なる神の道あって一人の神の人である時、彼女を女とすることはできぬ」と語っている[9]。アッタールは、神秘主義道において性別など問題にすべきではなく、性別を超えた単なる一人の人間として神と対峙することの大切さを説く。これが第五の教えである。

男装を選択するこの女の行動から、別のメッセージを読み取ることもできよう。人の外見にしか目が留まらない人々、換言すれば慧眼を持ち合わせない人々に対しては、自分の本質は見せないほうがよい、という教えである[10]。

男装した女は、自らが礼拝に専念するための神殿を王に求め、人々から身を遠ざけ、ひたすら勤行に励む。この隠遁生活も神秘主義道においては不可欠な要素である。七番目の教えとして、世間と交わらず、静かに神を思念することの大切さを挙げることができよう。

王が女のことを男と信じ王国を託そうとした時、女は自分が女であることを国の高貴な女性たちを通して公表し、王座につくことを頑なに拒み、信頼のおける人物に国の統治を任せる。ここでも物欲から心を断ち切ることが説かれていることになるわけだが、とりわけ地位や名誉に対する欲と限定すれば、これも八番目のアッタールの教えと見做すことができよう。

隠遁生活を送る女は、やがて奇跡を起こす力を持つようになり、その噂を聞きつけ、かつて彼女を不幸に陥れた張本人たちがそうとは知らずに彼女を頼ってやって来る。しかも、彼らを引き連れてきたのは彼女の夫である。どうすべきか苦悩した結果、女はすべてを正直に話せば治療に応じる男たちにと告げる。男たちも逡巡した挙げ句ついには真実を語り、身体の不自由さから解放されるに至るのである。九番目のメッセージは、自分のために他人を騙し欺き、虚偽を求めることに対する報いである。

それと同時に、この場面での女の対応は、模範的神秘主義修行者のとる態度として注目に値する。女はあれほど散々な目に遭わされても、惨めな姿で救いを求める男たちを見放すことなく、彼らの欠点に目を塞ぎ、寛大な心で向き合う決心をし、彼らの治療を請け合い、全員例外なく元通りの身体に戻す[11]。寛大であることも神秘主義道を歩むうえで欠かせない資質である。

以上、神秘主義道を歩む際の十の心得をこの逸話から抽出

することができた。この十の心構えは、ペルシア語による最古の基本的神秘主義散文テクスト『神秘主義入門解説(*Sharh-i ta'arruf*)』の内容に照らし合わせてみても、時には部分的にあるいはすべてを、時には他を内在させるような形をとるなどの臨機応変さが求められるものの、神秘主義修行者が最初に自覚しておくべきとされる心構えとほぼ合致するということをここに付言しておきたい[12]。

ところで、アッタールが一人の女性、しかも欠点のない理想的な女性を物語の主人公に据えたのは何故だろうか。品行方正で高貴な美男を物語の主人公にすることもできたであろうに、敢えて女性を理想像として登場させ、そこに情欲の塊と化した男性たちを次々と投入する、という手法は、当時としては非常に斬新で、読み物としても当時の市井の人気を博したであろうことは容易に想像がつく。さらに、物語の中で女主人公が自分の正体を明かす相手として選んだのは、高貴な娘たちとその母親であり、アッタールがこの女性たちに「慧眼を持つ人々」の役割を与えたという点にも注目すべきである。これは、アッタールという詩人が当時の女性に対し、人並み以上に肯定的で優しく温かい眼差しを注いでいた顕れであり、物語の中で女性に男性よりも一段高い地位を与えようと試みた結果であると考えられはしないだろうか。これは、当時のスンニー派イスラームという完全なる男性優位社会の中で、敢えて女性に敬意を払い、人間としてより尊敬されうる高い地位を与えることによって、人間は男女の別ではなく一人の人間としてどうあるべきかが重要なのである、という一神秘主義者アッタールの考え方の表出とも受け取れよう。アッタールが物語中ただ一度言及するこの女の名が「マルフーマ」すなわち「神に慈悲をかけられた女、神に祝福された女」[13]であることからも、彼女に対するアッタールの肯定的・好意的な視線が窺われる。

では次に、非の打ち所のない美女とは対照的ともいえる、老婆を主人公とした作品を見ていくことにしよう。

二．老婆の物語

老婆が主人公として描かれている物語は全部で八話あるが、ここではその中でも代表的な二つの逸話（第九章第九話と第十四章第五話）を紹介することとしよう。二話ともたいへん短い逸話であるため、ここに全文を訳出する。

「心燃え尽きた老婆の話」（第九章第九話）

ある日バグダードのバーザールから怖ろしい火の手があがりました。人々の間から悲鳴が上がり、火事で大騒ぎとなりました。

そこに哀れで不幸な老婆が杖を手に現れました。誰かが彼女に言いました。

「行くんじゃないぞ、気でも狂ったか。あんたの家も燃えているぞ。」

女は言いました。

「気がちがっているのはお前さんのほうじゃないか。だまらっしゃい！　神は私の家を燃やしはせんのじゃ。」

ついに火は家々を焼き尽くしましたが、その老婆の家は燃えずに無事に残ったので、人々はこう言いました。
「おい、苦痛と悲哀に身を置く婆さん、あんたはこの謎をどうして知っていたのかい？」
するとその謙虚な老婆はこう答えました。
「神は私の家か心か、どっちかしか燃やせないのさ。神は私の狂った心をすでに悲しみで燃やしてしまわれたのだから、私の家まで燃やすなどということはありえないのさ。」[14]

「老婆がシャイフに忠告する話」（第十四章第五話）

ある日敬虔なシャイフが壁のミフラーブ（モスク内でメッカの方角にある壁龕）に背を向けて座っていると、モスクのドアから一人の老婆が入ってきました。彼女の性根はアリフのように真っ直ぐでしたが、背はダールのように曲がっていました。老婆はシャイフに言いました。
「お前さん、死にかけているじゃないか、穢れているじゃないか、清廉を誇示しているじゃないか、シャイフという地位にいることに思い上がっているな。外に出な、さあ、ミフラーブの前からどきなされ。」

＊　＊　＊

あなたは自分の身近な人々のために多くの事をおこなってきた。彼らに賞賛され励まされることであなたの信仰心は失せ、上りつめた地位に思い上がり、あなたの行動の記録書を黒くしてしまった。おお、愛しい者よ、自らを愛で燃やせ。地獄を怖れるがゆえの崇拝や礼拝をおこなっても意味はない。それでは未熟な禁欲主義者にすぎない。禁欲主義者に成熟を求めるのは誤りだ。なぜなら禁欲主義者は未熟で、まるで生焼けのレンガにすぎないからだ。愛を知る恋人は蝋燭のように身を焦がし涙を流す。その涙や熱情の中に自らを集約させている。一晩中涙を流し身を焦がし、陽が昇る頃には命の灯は消えているかもしれない。涙も涸れ果て、身を焦がすほどの思いも冷め、命の灯が消えれば、彼の名は「愛しい人に殺された者」となる。彼は帳の内で愛しい人と結ばれ、彼にしてあげられることは何もなくなるのだ。[15]

物語の分析

第一章でも指摘したが、老婆の物語の中でも、ペルシア語のアルファベットの形の特徴を生かした、伝統的な直裁な比喩表現が多用されている。二番目の逸話では、アッタールは腰の曲がった老女の姿を「ダール」と形容する。ペルシア語のアルファベットの十番目の文字ダールは د という湾曲した形状なので、腰の曲がった老人の姿の譬えとして頻繁に用いられる。また、アルファベットの最初の文字アリフ ا は棒が真っ直ぐ立ったような形状で、ここでは老婆の飾り気のない、心の中を直裁に表現する性格の譬えに用いられている（アッタールの逸話においては、老婆が手にする杖の形状の譬えとしてアリフが用いられている場合もある）[16]。
また、ペルシア文学における老婆は、いつ始まっていつ終わるとも知れぬこの世の譬えに用いられることもままある[17]。ここでは紙幅の関係上取り上げられなかったが、ひたすら糸車を

回し糸を紡ぎ続ける老婆の姿に現世を譬えるのがペルシア文学の常套手段で、アッタールもその例外ではない。長い年月を表すのであれば性別は問わないのだろうが、糸車の前に座ってひたすら糸を紡ぎ続けるという絵図には、やはり年を重ねた女性の姿がふさわしいと詩人たちが考えたにちがいない。

年齢を重ねた人の人生経験は、何物にも代え難い宝物である。アッタールは説話の中で、その宝物を持つ老婆に堂々と自らの思うところを発言させている。最初の逸話では、老婆の家だけ燃えない保証などどこにもないと誰もが思うのだが、結局は老婆の言う通りに奇跡が起こり、彼女の家だけが惨禍から免れる。

ここでは、アッタールが「狂人の体をなす賢人」[18]に課したのと同じ役割を老婆に担わせていると解釈することもできる。奇跡を目の当たりにする前、人々は老婆に「気でも狂ったか」言っている。通常、正気であれば発言しない（または発言できない）言葉を、アッタールは度々老婆の口を借りて語る。他の逸話でも、例えばガズナ朝のスルタン・マフムードに向かって堂々と物申す姿や、きらびやかな王侯貴族を「着飾ることに夢中とはなんと哀れな奴」と平然と批判したりする老婆の姿も描かれている。いわば、社会の不満の代弁者として、アッタールは老婆に重要な役割を担わせているのである。

しかし、老婆が自分の家は燃えないと豪語したのには、別の理由を挙げることができる。それは、自らの全存在を賭して神を崇拝し、神に対して強く純粋な愛を抱き続け、心を燃やし尽くしたという自信があったからである。奇跡を起こす力を備えるためには、ただ単に無味乾燥な隠遁・禁欲生活を送るのではなく、愛が不可欠であるというアッタールの強いメッセージが窺われる。

神秘主義道において神と邂逅するには隠遁生活だけでは不十分で、それまでの人生すべてを賭すほどの激しく強い真の愛が必要である強調するのが、二番目の逸話である。現代イランを代表するペルシア文学研究者プールナームダーリヤーンは、この物語を丹念に細かく分析した結果、隠者と恋する者へのアッタール自身の見解が、平易で明解な言葉で示された、おそらく最初で最古の物語がこの逸話であろうと推察する。そして、アッタールの他の叙事詩とりわけかの有名な『鳥の言葉』の中の「シャイフ・サンアーン物語」や数多の抒情詩にもこうしたアッタールの見解が繰り返し示されていると指摘している[19]。

今一度、二番目の逸話に目を向けてみよう。この話では、老婆は愛を知らない隠者たるシャイフを未熟者と見做す（未熟さを「生焼けのレンガ」に譬えるのは、日干しレンガで建物を造る地域ならではの表現といえようか）。シャイフには愛の経験がなく、心を燃やすことも愛の苦痛を味わうこともないままに師となり、多くの弟子がいることを誇りにしている。この自尊心という帳、自分というありがたい存在が人々を幸福にしてやれるのだという奢った考えがある限り、隠者は不完全なままであると老婆は指摘し、自分と同じ空間に身を置くには、愛を経験し愛の苦痛や苦難に耐えよ、と隠者に向かって言い放つのである。この物語では、老婆がシャイフに対し、彼が不完全で未熟だと叱責するところから始まるが、かのシャイフ・サンアーンはある夢を見たことがきっかけとなり、その後愛に翻弄され、愛に起因する多くの不幸に見舞われる。この叱責や夢というほんの

些細に見える出来事こそが、自尊心という帳を取り払うために神から与えられた恩寵というわけである。アッタールの抒情詩では、美しい人間の姿で現れる神や大天使ガブリエル、キリスト教徒、キリスト教徒の子供、ペルシアの美少年、トルコ人、美女らが隠者の前に現れ、隠者を愛という酒に酔わせ、モスクや庵から連れ出す。そして、隠者は世間の非難と危険に満ちた小路を彷徨った挙げ句、ようやく愛の対象と邂逅するに至る。

二番目の逸話の後半部分は、アッタールが読者一般に向けて語る忠告である。この物語の読者がどのような立場の人であれ、多くの人が何かしら自分は社会の役に立ってきたと思っているであろうし、そう思いたいのが人の常である。しかし、その考えに対しアッタールは「それほどまでの思い上がりは、最後の審判の日にあなたの行状を記したノートを悪行で埋め尽くすだけ。おお、愛しい者よ、外見や形式にとらわれず、愛する対象への愛の炎で自らを焼き尽くしてしまうがよい」と呼びかける。精魂込めて心から愛した結果、たとえ命果てようとも、愛の対象に到達できたのであればそれ以上の幸せはないはず、と説くのである。

ペルシア文学では、蝋燭がぽたぽたと蝋を垂らしながらあかあかと燃えるさまは、恋する者が愛しい人を思いながら会えない苦悩に涙を流すさまと重ねて表現される。蝋燭は一晩燃え続ければたいてい燃え尽きてしまうだろう。一晩泣き明かした挙句朝に命が果てたのであれば、それは恋する者にとって本望とアッタールは説く。情熱的で激しい、真の愛を、できるだけ多くの人々に知らしめたいと強く願う、詩人という表現者の思いの丈が凝縮された、実に美しい比喩表現である。

おわりに

『神の書』の完璧な女性像や老婆の姿を通し、我々は修行という苦難も、真の愛も経た後に、ようやく「神」に到達できるという教えを授かった。しかし、「神」とアッタールが称するものの正体とは何か。ふと疑問が湧く。魂の究極の平穏や安寧が保証された境地のことではないのだろうか。前出のプールナームダーリヤーンは最新の学会発表において、完全なる性質(ṭebāʿ-e tām)についての研究の結果、神秘主義修行者たちが神との邂逅と称するものは、実際には「自分自身の天使の部分」あるいは「天界的な自分」との出会いであると指摘した[20]。人間誰にも天使のように清らかな部分があり、それが自身を制御し、守り、正しく導いてくれるのであり、人間は自分自身の美しい部分を知るために鍛錬の日々を送り、愛を求める。神が実在するかどうかは永遠の謎でしかなく、よって人間が神に会える保証などなきに等しい。自分の煩悩や執着心を削ぎ落とし、身を焦がすほどの愛を経験することによって、人間は自分の中の清らかで穢れを知らない魂、自身の天使というべき最も美しい姿に行き着くのである。一三世紀の神秘主義詩人ルーミー(Rūmī, Jalāl al-Dīn Muḥammad Balkhī 一二〇七―一二七三)が、我々は虚の世界に生きており、真の世界は人間の心の中にあると度々語るように、人間は実に大いなる存在なのであり、それを我々日本人であれば「神」と、また各言語や地域によって固有の慣れ親しんだ名称で呼んできたにすぎないのである。

このように考察してくると、遠い世界の、我々とは無関係に見えていたイスラーム神秘主義が、人間の生き方を追求した一つの方法なのであり、誰に対しても理想的な生き方を提示するヒントになり得ると思えてくる。我々も欲望に振り回されず慎ましやかに、しかし身を焦がすような愛を経験することによって、一度きりの人生を豊かに生ききってみたいものである。

参考文献

‘Aṭṭār-i Nīshābūrī, Farīd al-Dīn Muḥammad; Shafi‘ī Kadkanī, Moḥammad-Reżā(ed.) 1387/ 2008
Ilāhī-nāmah, Tehrān, Sokhan.

――――; Este‘lāmī, Moḥammad 1372/ 1993
Tażkerat al-Awliyā, Tehrān, Zavvār.

Ḥāfiẓ-i Shīrāzī, Shams al-Dīn Muḥammad ibn Muḥammad; Khaṭīb Rahbar, Khalīl(ed.) 1374/1995 (chap-e shānzdahom)
Dīvān-e ghazaliyāt-e Mowlānā Shams al-Dīn Moḥammad Khājeh Ḥāfeẓ-i Shīrāzī, Tehrān, Ṣafī-‘Alīshāh.

Mustamlī Bukhārī, Khājah Imām ‘Alī Zāhid Faqīh ‘Ālim Abū Ibrāhīm Ismā‘īl ibn Muḥammad ibn ‘Abdullāh; Rowshan, Moḥammad 1363/ 1974
Sharḥ- al-Ta‘arruf limażhab al-Taṣawwuf, 4vols. Tehrān, Asāṭīr.

Pūrnāmdāriyān, Taqī 1390
Dīdār bā sīmorgh, she‘r va ‘erfān va andīshe-hā-ye ‘Aṭṭār, Tehrān, Pazhūheshgāh-e ‘olūm-e ensānī va moṭāle‘āt-e farhangī.

ファリード・ウッディーン・ムハンマド・アッタール著、藤井守男訳
一九九八年
『イスラーム神秘主義聖者列伝』、国書刊行会。

佐々木あや乃　二〇一五
「ペルシア神秘主義説話文学にみる「狂人」――アッタール著『神の書(Ilāhī-nāmah)』の場合――」『総合文化研究』第一八号、東京外国語大学総合文化研究所。

註

1　佐々木　二〇一五。

2　‘Aṭṭār-i Nīshābūrī, Farīd al-Dīn Muḥammad; Shafi‘ī Kadkanī, Moḥammad-Reżā(ed.) 1387/ 2008 p.131, beyt 484.

3　Ibid., beyt 487.

4　Ibid., beyt 489.

5　Ibid., beyt 490.

6　idem, p.132, beyt 492.

7　idem, p.131, beyt 488.

8　イラン人の海に対するイメージとして、ハーフェズの有名な抒情詩の一句を挙げることができる。

暗い夜、波への恐怖、おそろしげな渦潮
この我が状況が浜辺で気楽に過ごす人々にどうして分かろうか
（抒情詩一）

9　ファリード・ウッディーン・ムハンマド・アッタール著、藤井守男訳
一九九八年　五一頁。

10　ペルシア神秘主義文学の重要テーマとなった神秘家ハッラージュが好例である。ハッラージュは「我は神なり」という酔言を公の場で語ったため、不信仰者の宣告を受け、ついには処刑されるに至った。ハーフェズもハッラージュをさすと考えられる次の句を遺している。

師は言った「高い絞首台で果てたかの友
その罪は神秘を明かしたこと…」
（抒情詩一四三）

11　寛大さは、ハーフェズの次の言葉にも見られるように、神秘主義道において最も重要な性質の一つである。ハーフェズは、自らの詩的世界の中で最も敬愛し、自らの師と仰ぐ人物像「酒場の師 (pīr-e moghān/ pīr-e meykhāne/ pīr-e meykade/ pīr-e mey-forūsh/ pīr-e kharābāt/ pīr-e dordī-kash/ pīr-e mā)」の特徴の一つに、他人のあら探しをしたり欠点を指摘したりしない寛容さを見出している。

酒を飲む我が老師にたとえ金や権力がなくとも
神から与えられた気前のよさ (ʻaṭā-bakhsh) と
過失を見逃す (khaṭā-pūsh) 美点が備わっている
（抒情詩一二三）

12　『神秘主義入門解説 (*Sharḥ-i taʻarruf*)』は、イスラーム法学者・ハナフィー派神学者かつ神秘主義指導者であったカラーバーズィー (Bukhārī Kalābāẕī, Shaykh Imām al-Zāhid al-ʻĀrif Abū Bakr ibn Abī Isḥāq Muḥammad ibn Ibrāhīm ibn Yaʻqūb d.995) がアラビア語で執筆した『神秘主義入門 (*Al-Taʻarruf li-maẕhab al-Taṣawwuf*)』を、ムスタムリー (Mustamlī Bukhārī, Khājah Imām ʻAlī Zāhid Faqīh ʻĀlim Abū Ibrāhīm Ismāʻīl ibn Muḥammad ibn ʻAbdullāh d.1042) が原文を引用しつつ、明解で平易なペルシア語に翻訳・解説した四巻から成る散文作品。カラーバーズィーの『神秘主義入門』が簡潔で短かったため、大導師ムスタムリーがそれをペルシア語に訳しつつ、イスラーム神学・ハディース（預言者の行状伝）学・イスラーム法学等多岐にわたる自らの知識を駆使して解説を加えている。

13　ʻAṭṭār-i Nīshābūrī, Farīd al-Dīn Muḥammad; Shafiʻī Kadkanī, Moḥammad-Reẕā(ed.) 1387/ 2008 p.132, beyt 494.

14　idem, p.228.

15　idem, p.288.

16　他にも、麗人の小さな口がアルファベットの二八番目の文字ミーム م で表されたり、麗人のくるくると輪を描いた豊かな髪が、時にこのミームと六番目のアルファベットジーム ج で示されたり、時にダールのみで表されたりもする。アッタールは別の逸話において、アリフと二七番目の文字ラームを組み合わせた ل という形状を、ターバンを巻いた様子に譬えている。

17　ʻAṭṭār-i Nīshābūrī, Farīd al-Dīn Muḥammad; Shafiʻī Kadkanī, Moḥammad-Reẕā(ed.) 1387/ 2008 p.180-182.

18　「狂人（ウガラーイェ・マジャーニーン）の体をなす賢人」とは、何の恐れももたずに自らの主張を声高に語る存在で、善悪の区別、人間の道徳的な弱点を認識しているため、対話の相手や読者に不意打ちを食らわせるような鋭い言動を見せる。詳細については、佐々木二〇一五を参照のこと。

19　Pūmāndāriyān 1390: 266.

20　Congress of Spiritual Horizon and Works of Attar-e Neyshabouri (by Grant-in-Aid for Scientific Research(C), Principal Investigator: SASAKI Ayano) in University of Isfahan, 12th & 13th of April, 2015 でのプールナームダーリヤーン氏の口頭発表による。